

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点
 「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2019 年度 国際共同研究成果報告書〔研究設備・資源活用型〕

2020 年 5 月 27 日 提出

1. 研究課題名	
市民が作った雑誌『京都 TOMORROW』のデジタル・アーカイブ化 (英文課題名: Digitalizing & Archiving of the Journal "KYOTO TOMORROW" Published by Citizens)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
小黑 純(おぐろ じゅん)	同志社大学社会学部メディア学科 教授
3. 研究分担者 (合計: 3 名) ※アート・リサーチセンター所属者は、「ARC 所属教員欄」に○印を付してください	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
折田 泰宏 (おりた・やすひろ)	けやき法律事務所、弁護士
大井 美夏子 (おおい・みかこ)	社会福祉士
樋口 摩彌 (ひぐち・まや)	立命館大学衣笠総合研究機構(日本学術振興会特別研究員 PD)
4. 研究課題の概要(300 字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点が分かるように明記してください)	
<p>本研究は 1988 年から 2003 年にかけて、京都に拠点を置く学者、弁護士、科学者、市民運動家らが、社会の諸問題を、市民の視線で捉え直し、議論を深め、発信し続けた、手作りの雑誌『京都 TOMORROW』約 50 号を対象にする。「京都の市民による、市民のための雑誌」として、特定のイデオロギーに偏らず、高齢者ら社会的弱者を包摂するベクトルで編集された。この編集方針に共鳴した、著名な文化人が数多く寄稿した。「多事争論」を信条とした、先駆的な雑誌だったと言える。</p> <p>紙媒体の雑誌として現在すでに稀少性があり、著名な文化人の言説を記録した、貴重な日本・京都の文化資源として、デジタルアーカイブ化が急がれる。内容を調査し、データベース化すれば、社会運動研究やジャーナリズム研究だけでなく、社会学、政治学、行政学、社会福祉学、メディア研究論といった、学際的なアプローチが可能となる。</p>	
5. 研究成果の概要 (この項は、本センターのホームページ・紀要等で公開することがあります)	
<p>2018 年度、雑誌『京都 TOMORROW』は ARC 近代書籍 ポータルデータベースに全文を公開した。</p> <p>2019 年度は、そのデジタルアーカイブを用いて、『京都 TOMORROW』の研究を進めた。</p> <p>本研究の主眼は、雑誌のデジタルアーカイブ化によって、資料のアクセス環境を簡便にし、それによってジャーナリズム研究以外の視点から雑誌記事を用いた研究が増えることを目標にしている。本研究はその実践として、市民活動の実態調査という視点で研究を行い、「市民メディアとしての『京都 TOMORROW』」("KYOTO TOMORROW" as Citizen Journalism)『アート・リサーチ』20 号としてまとめた。その研究内容を以下に示す。</p>	

本論は、1988年10月から2003年秋に京都で発行された雑誌『京都 TOMORROW』を、京都の社会状況を踏まえながら、特集記事を質的に分析したものである。その結果、京都市民は地域のミニコミ誌として自主的に『京都 TOMORROW』を発行していたことが明らかになった。その内容は景観問題など多様なテーマに至っており、紙面上でも議論がなされていた。すなわち京都市民は、『京都 TOMORROW』によって市民団体が連携し、運動を続けるために基盤を築いたといえる。

6. 研究業績 (日本語以外に英語名称もあるものは、できるだけ日英両言語でご記入ください)

(1) 著書

(2) 論文

「市民メディアとしての『京都 TOMORROW』」("KYOTO TOMORROW" as Citizen Journalism) 共著、2020年3月、立命館大学アート・リサーチセンター、『アート・リサーチ』20号、小黒純、樋口摩彌、pp.37-52、査読有

(3) 研究発表等

(4) 主催したシンポジウム・研究会等

(5) その他研究活動(報道発表や講演会等)

(6) 受賞学術賞

(7) 科学研究費助成事業

(8) 競争的資金等(科研費を除く)

(9) その他